

天然素材を用いた服飾資材の可能性について ～MARIE de TOITA のバンブードレス～

朝月 真次郎・久保 顯彦・平光 くり子

服飾芸術科



1. はじめに

日本古来、竹そして竹で作られた道具類などは私たちの日常生活の中に於いてごく身近に存在し、それらを用いた習俗も数多く目に触れる機会があり、浸透していた。

日本人は昔から生活していく上に於いても神の存在を大切にする人種であった。

田で作物が収穫されると田の神に、海で魚が収穫されると海の神に感謝するというように、日本人にとって豊作、豊漁をもたらしてくれる神は大切な存在であった。そうした中で人々は竹もまた神聖なものとしてとらえていた。(写真1参照)

竹は本来他の樹木に比べて成長が大変早く、冬でも青々としたなどの特質を持っていることから霊的な力を持ち、神秘的な存在の樹木と考えられてきた。強い霊力を持つ竹は神仏と結びつき現在に於いても、信仰にまつわる行事にはかかせない重要な材料の一つとして使われ続けているものである。

神聖な竹には、神が降りたち、門松、七夕に竹が使用される日本の代表的な風習にもなっている。

正月に神社にて参拝者が大福帳、米俵、小判などがついた福笹を買い求め商売繁盛を祈願する。福笹も神の依代として代々培われてきている。

写真1



戸板女子短期大学のオリジナルブランドである MARIE de TOITA のドレス制作にあたり、ドレスの基本である骨組みが天然素材から合成素材に変化してしまった社会状況を知る必要性を感じた。(写真2参照)

そして再び、天然素材を取り入れた共生について本学オリジナルブランドの誇りを学生と共に共有できる考えを持つことに論点を置きたいと思っている。

写真2



2. 再び、竹との共生を求めて

MARIE de TOITA の竹ドレス

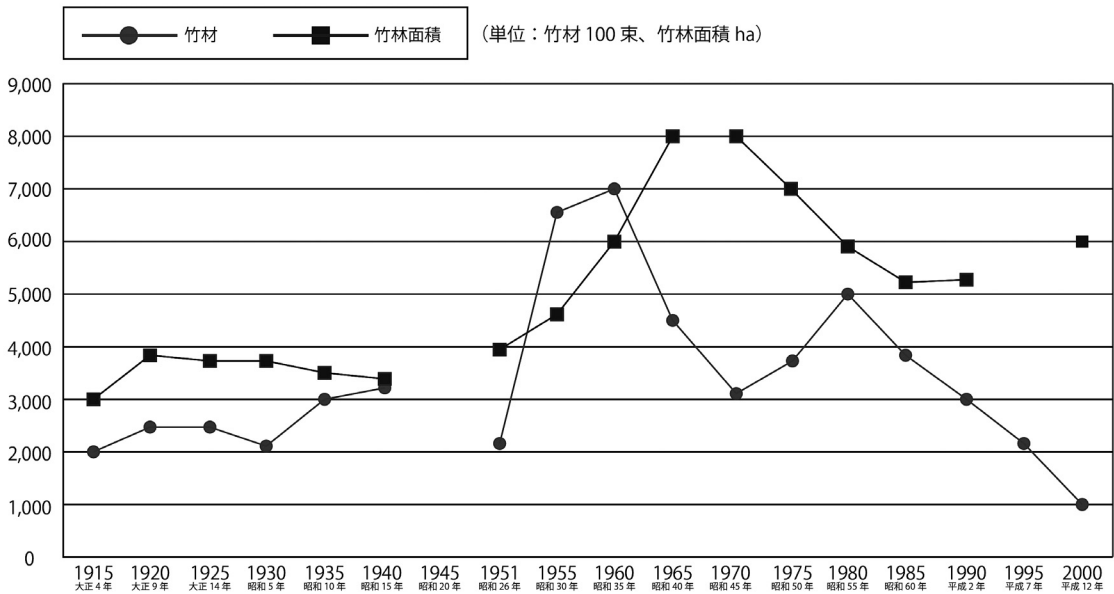
日本古来の伝統行事と対比して顕著に表れている竹材の使用状況をグラフにて見て頂きたい。

竹林面積も減少に転じているがそれにわをかけて大きく減少しているのが、竹材の生産量減少である。

例えば、ざるや籠といった竹製品は日本の人々と竹との長くて深い関わり合いを持ってきた。しかし現在では、これらの竹製品を含め、竹材そのものも見かけなくなっている。

生活の中で身の回りから、いつ、なぜ、姿を消してしまったのか。

(本来は日本全体での竹データで処理したかったが千葉県にしぼる)



このグラフは過去85年間の千葉県、竹材産出量と竹林面積をほぼ五年ごとに集計したものであり、このグラフを見ると第二次世界大戦前は竹林面積ともほぼ変化がないが、ゆるやかな増加傾向がうかがえ、比較的安定。

戦後は一転して急激な増加と減少を示していることがわかる。

まず、竹材産出量は1951年（昭和26年）から1955年（昭和30年）に約三倍の680000束に1960（昭和35年）に705000束でピークに達し、後の10年間で急激に減少していく事が分かる。

このグラフはあくまで千葉県の竹材生産量の推移であるが日本全体の推移としても条件的に同じ現象が生じているものである。

全国の統計も含め、急速に減少し、いったん1980年（昭和55年）緩やかな回復を見せるが、減少方向に歯止めがかからず、現在の状況に至る。

一方、戦後の竹材面積は竹材生産量を追う様に増加を続け1965年（昭和40年）から1985年（昭和60年）に最低となり、以後はまた少しずつ増加する傾向となっている。

3. ビオトープの時代

MARIE de TOITA の竹ドレス共存の意義

1955年（昭和30年）から1970年（昭和45年）にかけての時代は戦後の復興に伴って戦前までつづいてきた竹材や竹製品を使用する日本の生活様式が一層進展したことを示しており、日本の歴史上、竹がピーク時活躍したのはこの時期といえ、その後社会は大量生産と大量消費の時代に入っていく。

家庭で使われる日用品も電気製品となりあらゆる産業の世界も機械化され竹筴、竹籠類も機械化されたプラスチック製品に変化。

竹材はそのプラスチック、鉄、アルミニウム等に変化するばかりか生活、生産様式の変化から竹材そのものが必要とされなくなってしまった。（グラフ参考）竹林が不要となった結果、竹林は宅地、工業団地化として開発され残された竹林は放置されていくことになる。

昨今、話題となっているビオトープ（biotope ドイツ語）とはバイオトープ（biotope 英語）とも表記し生物群集の生息空間とも略される植物や魚、昆虫を共存させた人間的空間を示すことが多く失われた自然回復を願い少しでも自然と触れ合える想いの場である。

共存共栄が叫ばれる今日の世界の中で MARIE de TOITA の竹ドレスも竹材の復興に一役買いながらビオトープの世界を学生に伝えていくことができた

ば幸いである。

4. 千葉県に分布する竹、笹類

では千葉県にはどれだけの竹、笹類が生育しているのだろうか。

野生種と主な栽培種を含め七属（マダケ属、オカメザサ属、ササ属、スズタケ属、アズマザサ属、ヤダケ属、メダケ属等）7属21種類が生息していることが分かった。

その中には千葉県に自然に生えている自然種、栽培だけがされている栽培種、栽培されていたものが逃げ出し、自生状になっているもの（逸出種）が含まれており、栽培種に於いてはよく栽培されていて目に触れるものを取り上げたもので、まれに栽培されるものを含めるとさらに種数は増えていくと思われる。

一言で千葉県に生息しているといっても自生種、栽培種、逸出種では意味が違いこのうち通常分類学で扱うのは自生種と逸出種の2種類となる。

自生種と逸出種の区別は必ずしも容易ではなく、たとえばマダケは日本に自生があるのか論争がある。（化石の記録から自生があったのが確かだが現在の生育状況から考えると千葉県のものが必ずしも自生であるとは考えにくいものとなっている）。

写真3



5. MARIE de TOITA バンブー（竹）ドレス

①和竹（モウソウ竹）による新たな骨組み

モウソウ竹によるドレス制作の前にモウソウ竹のくくりであるマダケ属の仲間の紹介を先ずしておきたいと思う。（写真3参照）

マダケ属は今回ドレスの骨組みにも使用する事になったモウソウ竹、そしてホテイ竹、クロ竹、最後になったが、マ竹の四種類があり、日本全域、千葉県全域に於いてもかなりの視野で分布している。この四種類の中からモウソウ竹を選出した理由は長さが保たれ、曲線にたえる力をもっていることである。

現在世界のほとんどのほぼ全部といっても良いボーンの素材は合成素材であり、（一部、米国では針金を使用）長さ、曲線も自由に調整出来る為、これに代わる天然素材、竹に関してモウソウ竹を選ぶにあたり、竹を栽培、管理している多数の産地の方々にも意味を聞きながら取り組んでいった。

前回制作のドレスはマリエドトイタブランドの基本マーメイド型であった為、長さを必要としなかった部分、マダケ属のマダケで骨組みが出来上がったが今回はファージンゲール（車輪）型の為、モウソウ竹により製作する事になる。

②クラシックスタイルでの製作

ルネッサンス時代（1450年代～1624年）は布を身にまといドレープしていた服から身体にフィットさせて着用する服へと完全に移行した時代であり、バロック、ロココ時代（1625年～1789年）の礎を作った時代でもあった。（写真4参照）

ルネッサンス時代はドレス等仕立ての基本となる技術が本領を発揮し始めた時代にあたり、服は構成されて硬さを増し、身体を支えるようになる。

これは近代の装いへと続く最初的基本要素ともいえる。

今回のドレスは分離できる袖、アンダースカート、及びオーバースカート、様々な長さのブリーチズといった多数の部分を組み合わせるものとなった。

身体の各部分をそれぞれに協調することはルネッサンス時代に生まれた自然科学的人体解剖への関心を反映するものでもあり、今回のドレスのポイントともなっている。（写真5参照）

写真 4

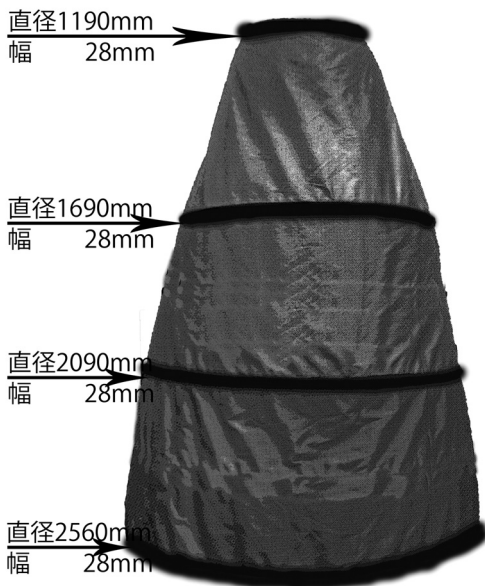


アントワヌ・ヴァトール作『ジュルサンの看板』1720年

ウエストから水平方向の補強材にあるフープをつけてスカートを身体から外側に張らせるフレンチ、あるいは「車輪」ファージンゲールの始まりであるフープ素材はルネッサンス期以降くじらのひげや藤のつるを編み込んだもの。戦後アクリル製、そして現在 MARIE de TOITA ドレスで竹となるものである。

写真 5

モウソウ竹ファージンゲールフープ
の構造図



6. おわりに

MARIE de TOITA ブランドと社会背景

先にも述べたビオトープが注目される現在も、日本の竹林を含む森林面積は減少している。異常気象が叫ばれている昨今、崖崩れなど自然災害を予防するためにも、森林面積を拡げていく必要があり、それには竹林を含む森林で木を間引きながら、適度に日光を入れ強度のある根をはらせていくことが重要である。そして間引かれた木や竹を服飾副資材のための再生用資材として活用するビジネスモデルを確立することの重要性を本研究で実感した。

MARIE de TOITA のブランドビジネスとして再生資材を積極的に活用することが本来の共存共栄であり、人が自然と共有しあえるビオトープなのである。

謝辞

本研究は、千葉県立房総のむら 猪野義信氏、西川博孝氏、福田久氏、斉藤英明氏の方からご協力をいただきました。

記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 房総ふるさと文庫－竹－ 2004年 千葉県立房総のむら
- 2) FASHION 世界服飾大図鑑 2013年 河出書房新社

写真6

